

木戸孝允（1833～1877）旧宅

19世紀の政治家・木戸孝允（桂小五郎としても知られる）が幼少期に住んでいた家は、通りから見ると一般的な平屋の町家に見える。中庭に足を踏み入れると2階建てになっており、その視覚的な錯覚は偶然ではない。なぜなら、江戸時代（1603–1867）には通常、2階建ては禁じられていたからだ。2階からは、通りすがりの人々（特に武士）を見下すことができ、そのことが好ましくないとされたからだ。裕福な家には2階を持てる経済的余裕があったが、この政治的都合および住人の安全を考慮し、通りから2階を隠すように設計する必要があった。

この家に和田小五郎として生まれた木戸は、7歳でエリート桂家に養子に出された。1849年、吉田松陰（1830～1859）が軍事学の教鞭をとる藩校「明倫館」に入学した。松陰は西洋思想と尊王思想を推し進めた。木戸は1852年に江戸（現在の東京）に移ったが、1856年に萩に戻り、長州藩初の洋式軍艦の建造を指揮した。彼は徳川幕府への抵抗勢力の高まりと密接に結びつき、1868年の明治維新後、木戸は新帝国の創設に中心的な役割を果たした。1871年には岩倉使節団に参加し、欧米を訪問して回り、明治新国家の承認を得て、1850～60年代に締結された不平等条約の再交渉を行い、欧米の制度を研究することを目的としていた。

現在、木戸の旧宅は一般公開されており、生前の写真や美術品、書跡などが展示されている。国指定史跡に指定されている。